

第16話 韓国の併合

わが保護国となつてから韓国内政は大いに改まるが、国内の形勢はなお
 穏やかでなく、ついに前統監の伊藤博文を暗殺する者が出るに至る。韓人の中に
 日韓合邦の義を唱えるものが続出して、ついに我が国もその必要を認める。

すでに前にも述べたように、我が国は韓国の外交権を収めて、その保護を全うする事になった為、
 明治38年12月21日、枢密院議長伊藤博文を統監に任じ、その翌39年2月1日をもって総監府を京城
 に開いた。

韓帝が密使を万国平和会議に送る

ところが、この時から1年有余か月の後、思いもよらない一大事件が起こった。それは外でもない、
 明治40年6月、第2回万国平和会議がオランダの首府ハーグに開かれた時に、韓国皇帝がこれに密使を
 送って、韓国が参列の通知を受けなかったことを指摘し、新たに同会議に参列する事を求めた事です。我
 が国から参列していた大使都筑聲六がこれを見て会議に抗議したので、韓人の参列の希望は同会議長によ
 って拒絶され、その一切の企ては全く失敗に終わった。しかしこういう事があるようでは、将来、その
 保護を全うする事は出来ないわけですから、我が政府は更に協約改定の準備に着手した。

韓国内政を指導

折から、韓国皇帝はにわかに退位し、皇太子李垞が立って位に即いたので、すなわち我が統監伊藤
 博文と韓国総理大臣李完用との間に新協約が成立し、新たに韓国政府は、施政の改善に関して統監の指
 導を受け、法令の制定および重要な行政上の処分なども皆その承認を要する事とした。即ち内治
 外交ともに全くわが統監の監理指導を受ける事となったので、韓国保護の実がここにはじめて挙がったの
 です。

日韓両皇室の親睦

こうして、両国の関係はますます密接となったが、ついで10月10日、わが皇太子嘉仁親王は韓国皇
 室を訪問のために、有栖川宮威仁親王、陸軍大将桂太郎、海軍大将東郷平八郎らをはじめ、数多の
 文武官を随えて親しく韓国に行啓された。実にわが皇太子の海外行啓の始めです。又、韓国皇帝は、
 11月19日に伊藤統監を皇太子英親王(李垞)の太師としてその教養を托され、翌12月9日には、皇
 太子を東京に留学させた。これより両国の親善はなお一層加わったが、明治42年6月、曾禰荒助が
 伊藤博文に代わって統監になるに及んで、韓国政府は更に司法事務をも日本に委託した。

伊藤前総監の遭害

こうして、韓国は日本の保護国となつてから多年の弊政も次第に改善されて来たが、国内の民情は
 なお必ずしも穏やかでなく、ややもすれば疑懼の念をいだいて、その堵に安んじないものもあった。い

第16話 韓国の併合

やいや、それどころではなかった。 ついに明治42年10月には、その晩年を韓国の指導開発のために捧げた前総監伊藤博文を、満州蛤爾濱の停車場で暗殺するというような狂態を演じる者さえ出るに至りました。

その次第を少しお話ししよう。

伊藤博文は統監をやめて後も、韓国皇太子の太師たることはもとのままであったし、特に明治天皇から同太子留学中の保育総裁たるべき命令を受けていたので、8月1日、同太子が東北地方および北海道の見学旅行を試みられた際にも随行して、同月2日に帰京した。その後、重要な使命を帯びて、10月14日、満州視察の途に就き、旅順、奉天、部順、長春などを経て蛤爾濱に赴き、26日午前9時、その駅の内車でロシアの大蔵大臣ココフツォフと会見してから、車を出て、プラットホームに整列した露国護境軍団の一部を検閲して、同9時半、数歩をかえした途端に、突然に軍隊の後方から現れた一青年に狙撃されたのです。七連発のピストルで連射した六発のうち三弾をその胸と腹に受けて、ついに彼は69才をもって薨じた。狙撃者は安重根という韓人でした。

この知らせが京城に達すると、韓国皇帝は大いに驚かれ、28日に親電を明治天皇に寄せると共に、親しく統監邸に臨幸して弔問された。又、詔勅を発して、太子太師伊藤博文の凶変を悼み、特に文忠と諡を贈られた。

伊藤博文の功績

わが国では朝野共に一層その死を悼んだが、明治天皇は特に位一級を進めて従一位に叙せられて、国葬をもって弔せられたのみならず、更に誄詞を賜った。その中に畏くも、

「志を立てて奮励王政の復古を唱え、難を排して邁往宏猷を維新に賛け、憲法を草創して刊らな典を修め、韓国を指導して渝る事のない盟を締び、股肱之倚り、柱石之任じ、忠貞君に奉じて公正事に当り、勲績倍す顕れて望み一世に隆し」

と仰せられた。実に博文は身を微賤から起こして、夙に吉田松陰の薫陶を受け、早くから国事に奔走して維新の大業をたすけ、その後も憲法の制定、内閣制度の創立、政党の改造などから、晩年の韓国の統治に至るまで、その国家に尽くした功績は極めて高く、極めて多かったです。だれが彼の不慮の災いに対して痛恨を覚えずにおられよう。

一進会の日韓合邦の議

さて、伊藤前統監の凶変後、日本政府は韓国に対して別段何の措置をも、要求をもしなかったが、当時、韓人の組織していた親日主義の団体である一進会では、12月3日、会長李容九が京城に会員の非常招集を行った。そこで、「韓人の中からああいう頑迷な、忘恩の徒が出るようでは、韓国の将来は憂慮に堪えないから、むしろ今日において日本と合邦するほうがよい」として、その儀を衆会員にはかり、満場の同意を得たのです。すなわち翌4日の朝、会員百万人を代表すると称して、書を皇帝、総理大臣お

よび統監にたてまつって、日韓合邦の利益を述べた。

今、その皇帝に上った大要を見るに、先づ始めに、

「我が韓国の病患、命脈の絶えてすでに久しい。しかし人がこれで未だ死んでないというのは、徒らに死屍がまだ生きてゐる如きを見るようだ。嗚呼、臣等今に至って、この死屍を奉じてどこに適帰しようか。我が一千万同胞がはじめて死処を知り、新たに生を得るは、日韓合邦して一大帝国を新造するに在る。日本天皇陛下、その信その義、山の如く斗の如く、韓国が清に没しなかつたのは豈天皇の徳にあらずや、韓国が露に入らなかつたのは豈天皇の仁にあらずや。しかるに徒に排日を事としている。翻然としてこれを思えば豈禽獣の心ならずや。」という書き出しで、「殊に日本皇室は、開闢以来、一胤にして姓なく、実に万国の匹なき所なり、わが皇室、幸いにその本に帰り、日本皇室と存亡を俱にされたなら、五百年必然の祀は却つて、日本と興に天壤無窮になるであろう。云々」

で終わっている。たしかに大局を達観したものといつてよい。

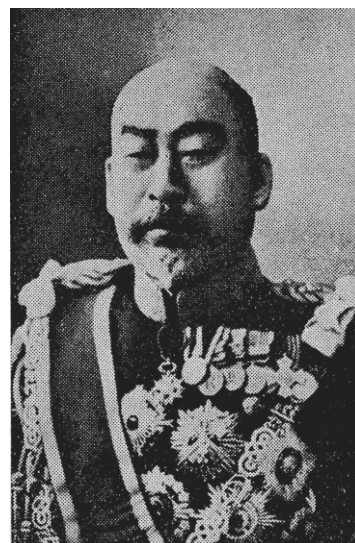
とはいえ、これに反対する者もまた無いわけではなかつたので、間もなく賛成論と反対論とが頻りに起こつて、ややもすれば治安にも妨害があつた。我が統監府は韓国政府に勧めて、一進会の合邦上奏文を却下させて、賛否両派の言論、集会を禁止して沈静を保つた。

韓国併合

たまたま曾禰統監は病に罹つて、明治43年1月に帰朝して、5月30日に陸軍大臣寺内正毅が新たに統監を兼任することになった。この時には、すでに韓国内の情勢は頗る切迫して、殆ど全く合邦に傾いてゐた。わが日本政府もまた韓国民の幸福を進め、且つ東洋の平和を永遠に保つためには、むしろ韓国をわが国に併合して、根本的な改善を加えることが必要と認めるに至つた。

そこで、寺内統監は7月23日に京城に赴任し、8月16日にはじめて合邦の議を開いたが、韓国皇帝を始め総理大臣李完用らも予ねて期していたところだったからか、協議は迅速に進んで、22日には両君主の裁可を得て、寺内総監と李総理大臣との間に併合条約が調印された。併合条約はすべて8か条から成り立っていたが、これによって、韓国皇帝は一切の統治権を完全かつ永久に我が天皇に譲り、天皇はこれを受けて、全く韓国を我が国に併合することを承諾されたのです。

ついで8月29日、明治天皇は大詔を下して韓国併合の趣意を天下に示し、又、外務大臣に關係諸国にこの事を通知させた。韓国皇帝もまたこの日その民に詔して、我が帝国の新政に服して幸福を受けれるようにと諭された。



寺内正毅



韓国 京城(現ソウル)

韓国の併合

王族優遇

又、この日、明治天皇は特に詔勅を下し、もとの韓国皇室および皇族の優遇を明らかにされた。

即ち、前韓国皇帝(李垞)を昌徳宮李王と称し、その子孫に永くこの称号を世襲させる。皇太子(李垠)および将来の世嗣を王世子とし、太皇帝(李熙)を徳寿宮李太王と称し、おのおのその配偶を王妃、太王妃または王世子妃とし、いづれも皇族の礼をもって待遇し、特に殿下の敬称を用いさせた。

又、李垞および李憲を公とし、その配偶を公妃とし、共に皇族の礼をもって待遇され、殿下の敬称を用い

第 16 話 韓国の併合

られた。

なお、これを同時に、朝鮮貴族令を制定して、公侯伯子男の五爵を定め、前掲以外の韓国皇族および大官の功勞のあったものに華族の礼遇を賜った。

又、韓国を改め朝鮮と称し、これを京畿道、黄海道、江原道、慶尚南道、慶尚北道、全羅南道、全羅北道、忠清南道、忠清北道、平安南道、平安北道、咸鏡南道、咸鏡北道の 13 道に分けた。

また、新たに朝鮮総督を置いて一切の政務を統べさせたが、初代の総督には前統監の寺内正毅を任じた。

朝鮮の施政

ここにおいて、朝鮮は永久に我が国の一部となり、ややもすれば東洋の平和を害した一つの禍根は確実に除かれたのです。こうして諸政が改まると共に、交通、通信の機関は備わり、産業は進み、貿易は盛んになり、租税は公平に課され、久しく弊政に苦しんでいた半島の民も悉く日本帝国臣民となって、内地の民と同じく、天皇のご人徳に浴することになったのです。

(第 16 話 韓国の併合 終わり。 次は前頁に戻り、第 17 話 国運の進歩)